

《4月例会報告》

## 2013年度研究会年報

### 合評会

---

#### 今年の年報は

---

21冊目となった全面研の研究会年報が完成し当日配布された。今まで向井さんが一手に引き受けていた編集作業を、今回は道岡さんが担当。異動の慌ただしい中でさぞ大変なことだったと推察する。

言うまでもないが、文集や冊子の編集は、単に印刷するだけでなく書き手との連絡や調整、ページ打ちや装丁作業など構想力やマネージメントが問われるが、手にしたこの黄色い冊子の手応えはいい。

「電信柱を眺めることが好きです。」という前書きは道岡さんらしい視線が感じられた。そのページには俯瞰ではなく、見上げるまなごしの写真が一葉添えられている。様々な情報が行き交うこの世の中だが、その情報によってドラマもアクシデントも生まれる。電線は迷路のように交差する。それを「関係性」とみためた感性がとても暗示的だ。

それでは、参加したメンバーの合評会をはじめます。

---

#### 「ハラの言葉」

尾崎 光弘

---

この原稿は、言葉には二種類あるという話から始まる。本文には「伝えるための言葉」と「沈黙の言葉」としてされている。特に後者を「内臓の言葉」と置きかえて、論が進む。

内臓の言葉とは、自己と対話する言葉のことで、感性的な心持ちと内臓の言葉（ハラという言葉）は連動するという視点が論じられる。

他者に発しないハラという言葉であっても、言葉である以上そこには認識が存在する。特にハラという言葉は、ひきこもりについて触れているように人間の深層に深く内在する。そこがこの原稿のミソだ。

合評の中で「腹が立つ」が「頭にくる」に変化することに気付いた尾崎さんは、認識論が主にタテの頭脳活動であると位置づけ、ハラという言葉はそれとは異なる心情や感覚の深層の言葉と捉えている。

ふとわれわれは認識論を頭脳活動と規定しすぎているのではないかとよぎった。

子ども達との学習活動の中でいくら論理や理屈を駆使しても伝わらないときがある。頭で分かっても体で分かっているからではないかとふと思う。いみじくも庄司先生が、尾崎さんか配列したコトワザを見て、肉体から思想化されていくんですね、と言った言葉が、このことを

考える上での大きなヒントになった。ほかならぬ柳田国男の仕事は、常民の感性を探り続けたからだ。

---

## 学校現場が求めるメンタル福祉教育 —「心の色」授業の可能性—

小田 富英

---

前述の尾崎さんの原稿との関連ということで小田さんの原稿の合評が行われた。その関連とは、その時の自分の気分(心)を色紙で表すことで内面を表出し、そこからコミュニケーションの糸口をつかもうとする授業の試みで、感性を相互にわかり合うひとつのきっかけにしようとしたものだ。

自分に気持ちを色にたとえ、色紙によってそれを表現する行為は、感性的ながらそれもまた一つの認識活動にほかならない。

このようなことを考えると、感性的な認識論もきちんと整えなくてははいけないだろうという思いを強くした。

---

## 現代の親に見る子育て観

篠原 賢明

---

ここ半年以上にわたって篠原さんが研究している「人の一生」の授業のための子育て観のアンケート(長野県北信地方)の集計結果がまとまった原稿として紹介された。アンケートの対象の地域の子育て観(産育習俗行事)をまとめると以下のようになる。

- ・地域の差がそれほど顕著に見られない。
- ・商業イベントの影響で盛んになっているものがある。
- ・共同体が個別化した存在となり、孤立感を感じる親たちが増えてきている。

合評では、お宮参りやひな祭りなどの現代の産育習俗が賑やかに行われる反面本来の意味や意義が見失われているのではないかという意見が出た。これらの背景にあるのは、現代の若い親たちが、一つのファッションとして行事を捉えているという姿だ。その顕著な例として最近定着しつつある「ハロウィン」が話題になった。

さらに子ども達の「お誕生会」ハイツから始まったのかについて意見交換がされたが、家族が誕生日を祝うようになったのは戦後になってからのようで、これも仲間内のお披露目意識が強く、産育習俗とは懸け離れた行事になっているような気がした。

どちらにしても、本当の意味で共同体が、かつてのように成長を少しずつ祝っていくという姿は廃れているのである。

---

## 授業・〈伝え〉の認識論

～〈伝える〉と〈伝わる〉～

植垣 一彦

---

植垣さんの原稿は、昨年11月の看護短期大学において行われた生涯教育講座でのコミュニケーションについての授業の紹介。

コミュニケーションを認識論と結びつけようとするこの試みは、「認識ののぼりおりが確かなコミュニケーションを成立せしめる基盤となる」という考えから展開されている。

本稿は、コミュニケーションとはいいながらタイトルにはあえて「伝える」「伝わる」という言葉を擁し、より具体的な状況を双方向性ととらえてネーミングしたという。

この「伝える」「伝わる」の状況をより明確にしたものが NHKTV の科学情報番

組『ためしてガッテン』だと植垣さんはいう。番組中で司会の志の輔が3人のゲストに分かったどうかを聞くと「ガッテン」ボタンを押すシーンが2回ある。それは三段階認識のステップが上がるときであり、それはまた「伝える」ことが「伝わる」ことになるという解説になるほどと思わせるものがあった。

座談の中で向井さんの認識論「冒険する認識論」「恋する認識論」「疾走する認識論」も紹介され、向井さんもその中で「ためしてガッテン」も含めて具体的な事象の中から認識をすくい取っていると庄司先生が評価した。

これはまた本稿の中の吉本隆明の言説と呼応する。それには、論理は常に具体的な体験をはらんでいるという理解で、それはまさに三段階連関理論と重なっていく。

小田さんが、柳田もまた聞き取るこの名人であったと紹介されたが、今後このコミュニケーションの教育は、大いに注目されていくだろうという予感がした。

---

## ことば遊びドリルに挑戦

伊東 峻

例会には必ずレポートを持ってくる若きメンバーの伊東君の原稿。

彼は、同僚の道岡さんや大先輩の向井さんの薫陶で、ことば遊びやコトワザの授業で徐々に自分の授業を展開しつつある。何よりもレポートの中からそのクラスの開放的な様子がうかがえて、最近の仕事をやりに過ぎて見通しのかかない若者とは一線を画す人物である。

4月から向井さんの指導を受けるといふ縁にめぐまれ、庄司先生はじめ全面研の期待も高い。

---

## 呪術・宗教教育

山田 学

山田さんは思考の引き出しも多く、さまざまな先達の思想も掌中にあるようで、その原稿も構想の壮大さを感じる。

注目点は縄文の世界に日本人の原点があるとする今までにないスケールの論文だ。本文中に架空認識史という耳慣れない言葉が登場するが、それは宗教が成立する以前のアニミズムの世界の直感性や無意識性が自然と共存し、われわれの根源的なベースとなっているという理解であろうか。

ただ、本文を読み進めると、野生と呼ばれるアニミズム賛歌は分かるとして、現代教育（主に学校教育のことか）への批判は容易には結びつかないと感じた。

庄司先生は本稿の中で山田さんが教育に言及したことを注目したが、呪術と宗教教育を結びつける作業は、山田さんの様々な論理の把握力と深い読書量を背景に今後さらに深化していくように思う。

---

E君へ

徳永 忠雄

自分で自分の原稿を表するのも変だが本稿は教員を辞した私の教師論。E君とはeverymanで特定の人物をささない。

道岡さんが唯一感想を述べてくれた下りは、全体を見つつ個を見つめるという私の教育技術の重要な一つだ。この映画的な絞りど開放の二重視線での子どもを見る視点は、私の映画好き・落語好きから高じたものと自認している。

最近読み返した「日本語とはどういう言語か」（三浦つとむ）の冒頭にモニター

ジュ論として同じようなことが書かれていて大いに頷くことがあった。

## 認識の「のぼりおり論」の新展開

庄司 和晃

合評会では時間もなかったこともあって先生はご自分の原稿にはあまり触れずに、残されたわずかな時間を欠席された方の原稿の解説にあてられた。

あらためて本稿を見てみると「のぼりおり論」の概念化が厚みを増し、看護学校の生徒用でもあるためか、様々な具体的な概念例が示されている。

概念化は、イメージや情報の整理であり思考のまとめなのであるが、日常の中でわれわれが無意識に行っている頭脳活動を自覚的に呼び覚ます装置ともなっている。

今回の合評では、第Ⅰ段階の「感覚」レベルで「ハラ（腹）」について考えさせられたが、われわれの意識の中で容易にのぼりおりしない認識について貴重なアプローチがあったと思う。

また内面的な活動に思えた認識論が、「ためしてガッテン」の例示に見られるように「伝える」行為が「伝わる」行為に昇華する過程を通して三段階理論として援用できることも理解できた。

庄司先生の語りによって戦後の研究史をわれわれは今紐解きはじめたが、庄司認識論の中には様々な要素が充ち満ちており、それらが化学変化を起こしていることを感じている。

表層の文言だけでは読み取れない深さを感じ、三段階認識論を安易に援用できないことにも気付くのである。それには自分の認識論を持ち自分の概念化を積み重ねていく必要があるだろう。

庄司先生がよく言う「〇〇さんの認識

論ができていますね」という指摘がそれに当たるように思う。

庄司先生が解説された弘前の今井誠さんの「人間にとって精神とは何か・抄（２）—庄司理論の考察と提言—」、京都大学の岩井貴裕「橋本教育基本条例案を問う（２）—そもそも教育とは何か—」については、紙面の都合もあり紹介だけにさせていただきたい。個々に読んで頂ければ幸いです。なお、向井さんの原稿「ことば遊びコレクション2013」については次回向井さんが来られることを前提に向井さん自身から紹介していただければと願っております。たしかに“向井遺産”ともいえる膨大な言葉に関する研究資料についてもぜひ言及していただければと思います。

## 初参加メンバー紹介

- ・道岡惇一（みちおかじゅんいち）さん  
道岡さんの息子で、小学校教師をめざす好青年。すでに向井さんの授業も見ているとか。今回の年報作業にも協力していただいた。

### 例会参加者

庄司、小田、植垣、長谷川、篠原、伊東尾崎、山田、道岡(義)、道岡(惇)、徳永

### 【次回例会】

日時：7月5日(土)

14:00～17:00

場所：成城学園大学棟3階会議室

内容：年報について

持ち込みレポートほか

- ・向井さんから事務局(徳永)に年報及び25周年の冊子のバックナンバーが送られてきて保管しています。必要な方はご連絡下さい。郵送料のみで送付致します。



